

自分の未来を考える

# 夢を持つことの大切さって？

将来の自分を思い描き、理想とする未来に向かっていくプロジェクト「28プロジェクト」を実践する品川女子学院中等部・高等部。同校で理事長を務める漆紫穂子先生に、自分の将来について考え、夢や目標を持つことの大切さについて聞きました。

これからの社会で最も求められる目に見えない力とは？

夢を実現するために

努力の原動力となる夢の見つけ方や、それを実現させるためのサポートには、どのような方法があるのでしょうか。独自のライフデザイン教育を提唱する品川女子学院の漆紫穂子先生に聞きました。生徒に寄り添い、未来を見据えた品川女子学院の取り組みの中でも、注目を集めるのが「28プロジェクト」です。

「28歳を女性の一つのターニングポイントとして設定し、社会で活躍する人材の育成を柱に据えたライフデザイン教育です。プロジェクトの具体例を挙げると、企業コラボ総合学習や起業体験プログラム、日本文化体験、問題発見能力を高めるデザイン思考など。これらの学びを通して生徒自らがモチ

ベーションを高め、潜在的な能力を引き出します」  
28歳を女性のターニングポイントととらえるのは、次のような理由があります。

「まずキャリアの視点で見ると、28歳は就職して5、6年が経ち、チームリーダーを任されるなど、一人立ちできる時期でしょう。一方で、第一子出産年齢が約30歳の今、女性にとって28歳は結婚や出産を考える時期でもあるのです」  
漆先生は「28プロジェクト」を通して生徒たちに身につけてほしい力として、特に重視する力があると言います。

「それはIQなどの数値で認知されない、非認知能力」と呼ばれる力で、本校で育成に取り組んでいるものを二つ挙げます。一つは共感力です。これは、国際社会の中で自分とは異なるバックグラウンドを持つ人々と仕事をする上で、

## 問題発見力



AIは過去のデータから分析して判断するのが得意だが、新しい問題の発見は人間にしかできない

## 共感力



グローバル社会において、さまざまなバックグラウンドを持つ人と仕事をする上で必要となる力

お話を聞いたのは

品川女子学院理事長・校長補佐  
漆紫穂子先生

早稲田大学国語国文学専攻科修了。都内私立中高の教員を経て、1989年より実家が1925年に創立した中高一貫校・品川女子学院に着任。2006年に同校の校長、2017年には理事長に就任する。「働きながら輝くために28歳までに身につけたいこと」(かんき出版)「伸びる子の育て方」(ダイヤモンド社)など、著書多数。



最も大切な力だと言われています。私たちの学校では常に複数人のチームで物事に取り組み、反省を次に生かす。そのようなやり方で、授業や部活、行事を行い、この力を育てています」

もう一つは「問題発見力」です。「新しい問題の発見は、過去のデータから分析して判断するAIには苦手な分野で、人間の仕事として残るものです。たとえば、中3の企業コラボ総合学習では、企業の方と生徒がゴールを共有し、社会課題を解決する企画や商品を開

発、社会に役立つアクションに落とし込むところまでやっていきます。それらの体験を通して課題意識が自然と生まれると同時に、自分を見つめることができ、興味の対象をキャッチするアンテナが立ってきます。それがより良い情報と出会い、チャンスを取り込む力につながるのです」

「28プロジェクト」を通して、同校の進学実績には変化があったそうです。「生徒たちは大学入試科目の先にある自分の学びたいことから進路

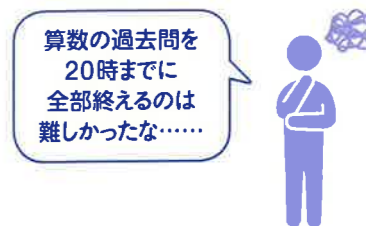
社会で活躍するために「28プロジェクト」を通して身につけられる力



品川女子学院では「28プロジェクト」を在校時に留めず、28歳のときに学校に集まって互いに成長した姿を見せ合う「28歳ホームカミングデー」を実施している。

## 子どもの夢を後押しする親の受け答えの「三つのプロセス」

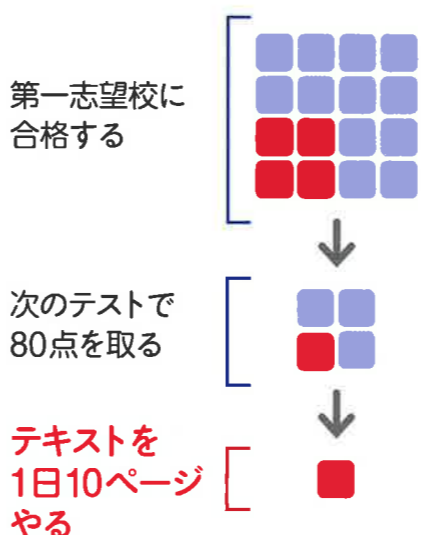
**3** 否定的なことは肯定的なことにする



**2** 抽象的なことは具体的なプロセスにする



**1** 大きな目標は小さな目標に分ける



## 夢を実現するために

## 計画を立てる際に大切なこと

**2** 誰かに任せられるのではなく自分で決める

**1** 試行錯誤して自分に合う方法を見つける

えには、三つのポイントがあります。一つ目は「大きな目標を小さな目標に分ける」です。「子どもが受験勉強の目標として、『第一志望校に合格する!』と言ったとすれば、親は『そのためにはいつまでに何をやる?』と尋ね、『塾のテキストを○月までに終える』などと目標達成のための計画を立てさせましょう。大きな目標を達成するために小さく分けて行動しやすくするのがいいです。大きな目標を小さく分けられたら、計画を表にまとめて、見える化するのもいいでしょう。できたところを塗りつぶせば、どこまで達成したかが一目でわかります。二つ目は「抽象的なことは具体的なプロセスにする」です。「目標を決めると、子どもは漠然

と『がんばる!』と答えることがあります。そのように抽象的な答えが返ってきたときは、『そのためにどうすればいい?』と具体的なプロセスを聞きましょう。『今日は算数の過去問を○時まで集中して終わらせる』などと、やるべきことを明確化させます。そして、三つ目は「否定的なこととは、肯定的にする」です。「具体化したプロセスに取り組み始め、目標の大きさを実感すると否定的になることがあります。そんなときは、達成できたところに目を向けさせ、『ここまでできていくから大丈夫』などと肯定的な言葉をかけてあげましょう。親は子どもをよく見て、努力のプロセスを認めてほめること。それ

を選択するようになってきました。そのため、以前よりも進学先が多様になっています」

運をつかみ生かすことのできる人の特徴として以下の五つが挙げられています。好奇心、持続性、柔軟性、楽観性、そして冒険心です。この五つが育つような環境を大人がつくり、社会と子どもをつなぐ。それが子どものキャリア形成に必要なと思います。親はたとえ無駄だと思っても、子どもがやりたいと言えれば思いっきりやらせてはどうでしょうか」

「AI技術の急速な発展により、どのような世の中になるのかが予測できなくなっています。だからこそ、今の小学生は社会がこれからどう変化していくのかを考え、将来自分がやりたいことを見つけることが大切になるでしょう」

「親は自分が経験したことをもとに、子どものやりたいことを制限したり押しついたりしない方がいい」ともアドバイスします。

「未来の社会がどうなるのかを知ること、自分について知ること、世の中に対する課題意識が生まれます。すると、さまざまな情報に対して、自分がやりたいことや向いていないこともわかってくる。それがチャンスをつかむことにつながっていくのです」

「子どもが新しい何かに挑もうとすると、親は子どもに失敗させたくないという愛情と過去の経験に基づいて判断から、『それは危ない』『そんなことうまくいきっこない』などと反対しがち。けれど、社会が大きく変化し、未来が予測できない時代に入った今、親世代の経験にこだわるのが、かえって子どもの可能性を狭めることにもなります。過保護にならず、子どもが越えるべきハードルをあまり取り除かないことが重要です」

「そのために親ができることとして、次のサポートを挙げます。『スタンフォード大学のクランボルト博士のキャリア理論の中で、目標の実現に向けて計画を立てる習慣を身につけることの大切さについて、次のように話します。』

「親の受け答え次第で、子どものやる気は左右されるもの。夢を後押しし、実現させるための受け答

「勉強計画を実現するのもPDC A (Plan) 計画、Do 行動、Check 評価、Act 改善) がカギだと思っんです。子どもによって自分に合う勉強法は異なるので、計画を立ててやってみて、うまくいかなければやり方を変えてみる。それを繰り返しながら自分に合うやり方を見つけるといい。そうして見つけたやり方は、自分なりの方法論として将来にわたって役立ちます」

「その際、『自分で決めた』という意識が自立を促し、子どもをより成長させると言います。

「中学受験への挑戦は、人生の選択の一つとするということ。子どもを大きく成長させ、親子のつながりを深める良い機会でもありません。大事な時期を過ごしているからこそ、受験のその先の人生にとって大切な価値観は犠牲にしないでください。お手伝いや学校行事なども含めて親子で受験をいかに楽しむかが大切だと思います」

「親は自分が経験したことをもとに、子どものやりたいことを制限したり押しついたりしない方がいい」ともアドバイスします。

やりたいことには挑戦させ、子どもの夢を後押しするサポートを心がけよう